

〈近刊紹介三〉

森 暢平著

『天皇家の財布』

新潮社(新潮新書) 二〇〇三・六刊行

二〇七頁 七二四円

本書は、これまであまり触れられてこなかった皇室経済の内実解明に挑んだ意欲作である。毎日新聞の元社会部宮内庁担当記者という経歴をもつ著者は、二〇〇一年四月施行の情報公開法に基づき開示された(部分開示も含む)行政文書をもとに「天皇家の財布」の検証を試みた初めての研究と言っても過言ではない。本書の目次は以下の通りである。

はじめに―情報公開法で「天皇家の財布」を検証する

序章 四つの財布―皇室予算の全容

第一章 宮廷費 その一

第二章 宮廷費 その二

第三章 内廷費

第四章 天皇家の財産

第五章 献上と賜与

第六章 皇族費

終章 国会と皇室経済会議

おわりに

まず序章で、「四つの財布」として宮廷費、内廷費、皇族費の三

つに分類される「皇室費」と宮内庁費の概要を説明した上で、以下、皇室費を中心に論が展開されている。

第一章及び第二章では、宮廷費について検証している。宮廷費とは、皇室の公的な活動に支出される費用であり、具体的な支出例としてまず宮内庁病院と御料牧場が挙げられている。とくに宮内庁病院は、施設が老朽化していることに加え、一九九五年に導入したMRIの稼働率の低さ、さらに患者数よりも職員数が多いという実態など、いくつかの問題点が指摘されている。つぎに天皇、皇族の地方行幸啓及び外国訪問(いわゆる「公的行爲」)を挙げ、この中でも地方行幸啓では、宮廷費からの支出は一部であり、その大部分の負担が受け入れ先の都道府県となっている現状を明らかにしている。赤字続きの施設や行幸啓経費の地方負担の多さなど、現状を踏まえた宮廷費のあり方について考えさせられる。

第三章では、内廷費について検討している。内廷費とは、生活費を含む天皇家の私的な費用であり、予算として年間三億二四〇〇万円(二〇〇三年度)が計上されている。本章では、主に内廷費の用途として人件費及び物件費の内訳を検証し、具体的な項目として物件費の中に祭祀費が含まれていることを挙げている。また興味深い点は、内廷費の変遷過程の言及である。内廷費は、新憲法施行後、金額が戦前の実績を基に物価上昇を勘案して算定されたが、高度経済成長期においては、一九六八年二月開催の「皇室経済に関する懇談会」で物価の上昇にあわせて自動的にスライドするいわゆる「一割ルール」という基準が定められた。この「一割ルール」は皇室経済に対する国会による統制の原則を制限するものであり、天皇家の人数の変化は考慮されない。また過去の実績額がスライドする仕組み

であるため、支出削減への動機付けは希薄となっている点を指摘している。

第四章では、天皇家の財産について検証している。まず天皇家の資産の実態として土地や昭和天皇の遺産の内訳とその形成の仕組みについて言及し、その上で第三章で言及された「一割ルール」の制定が天皇家の資産急増に影響を与えていることを指摘している。つぎに天皇家の資産の変遷として金融資産と美術品などいわゆる「御物」と呼ばれる私物財産の内訳について言及し、それらが国有財産、御由緒物、御物の三つに分けられることを明らかにしている。

第五章では、献上と賜与についてその実態と歴史について検証している。ここでは、献上と賜与の金額に厳しい制限がつけられていることと、現在はこれらを受ける意味合いが減少していることを指摘している。

第六章では、皇族費について検証している。皇族費とは、その名のとおり天皇家以外の宮家の私的な費用のことである。宮家は宮内庁と離れた関係にあるため、チェック機能が弱く、曖昧な点が多い。こうした宮家の経済を国がどの程度支えるのかは、敗戦直後から現在にいたるまで完全に決着していない問題であり、今後も議論されるべき点であろう。

終章では、皇室経済の意思決定機関である「皇室経済会議」の是非について言及し、最後にこれまでの議論を踏まえ著者は、「宮廷費には皇室が何をどこまで抱えるのかの問題がある」。さらに「内廷費には額改定の仕組み、献上・賜与のチェック方法を見直す余地がある」と、「皇族費にしても宮家のあり方をどうするのかなど根本的な議論が必要だ」との問題を提起している。

本書は、一般向けの新書の体裁をとりつつも、天皇・皇室にいくらず算が充てられ、何にいくら、どのようにして使用されているのか、その実態をわかりやすく論じている。そして、一九四七年の日本国憲法施行とともに成立した「象徴天皇制」という制度が、敗戦直後から現在に至ってどのように運用されてきたのか、または運用されているのか、その実態の一面を「天皇家の財布」から追った点で大きな意味があるといえよう。

昨今、皇室活動の安定性を確保するための「女性宮家」創設を含めた天皇・皇室に関する様々な議論がなされているが、まさに本書は、皇室そのもののあり方をどのように考えればよいのか、どうあるべきであるのか、その一つの手がかりを与えてくれる一冊である。

(舟橋 正真)